『児童研究』 第99巻、2020年、138-144

児童健全育成賞（數納賞）奨励賞

今治市児童館の人材確保と育成に向けた取り組みについて

愛媛県今治市
今治市健康福祉部子育て支援課こども健全育成係　主査　曽我部　剛隆

1．はじめに

今治市は、愛媛県の北東部・瀬戸内海のほぼ中央部に位置し、タオル、縫製、造船などが地場産業として発展している。人口規模は県下第２位で、風光明媚な景観や大山祇神社などの歴史遺産を誇る観光都市、造船・海運都市である。

今治市においては、市内７か所（枝堀、本町、朝倉、樋口、菊間、亀岡、伯方）に、直営方式の小型児童館を有しており、令和元年10月１日現在、嘱託職員６名（館長）と児童厚生員21名（正規職員３名、臨時・パート職員18名）の合計27名で運営している。

市内児童館においては、子ども健全育成、子育て支援、地域福祉を３本柱に掲げ、市内全域でその取り組みを行うことで、子ども達や子育て世代の問題解決に務めている。

児童館活動を支える原動力は、児童館職員の資質に他ならない。児童館職員に必要な資質とは、問題解決能力と来館者や地域との対話能力、それに加え業務に対する熱意であると考えている。

しかしながら、近年、児童館職員の人材確保は非常に厳しい状況にある。その要因としては、少子化による学生数の減少や職種の人気低下などが挙げられる。

当市においては、地元短期大学である今治明徳短期大学と連携協定を締結し、学生に児童館業務の魅力やスキルを伝えることで職員確保に務めている。

以下、今治明徳短期大学との取り組みを軸に、今治市児童館の理念や取り組みを紹介させていただきたい。そして他市児童館の参考になれば幸いである。

2．今治市児童館の理念について

今治市児童館に勤務する職員は、児童館職員である前に、基礎自治体職員である。基礎自治体職員の最終目標は、「住民の幸福度の向上」であり、その目標を達成することこそ、今治市児童館の理念であると考えている。

「住民の幸福度」について、その答えを導くために実施したアンケート結果を紹介したい。アンケート調査は、令和元年６月２日（日）に、今治市児童館の主催で「バリっこフェスタ」という名称で家族向けイベントを開催した。その際に、79名の保護者に対して実施したものである。結果は以下の通りであった。

「質問１あなたの幸福度を教えて下さい。」との質問に対しては、「幸福」との回答は34％、「まずまず幸福」は45％、「普通」は18％、「あまり幸福でない」は３％、「全く幸福でない」は０％であった。

「質問１を選んだ理由（幸福度因子）を教えて下さい。」との質問に対して、「幸福」を選択した人は、「子ども」、「家族」、「友人」との回答であった。

一方、「あまり幸福でない」を選択した人は、「家族との関係」や「お金・子どもの成長・災害の不安」という回答であった。

この結果から、住民の幸福度を向上させるためには、身近に良好な関係性が存在するかどうかが重要なポイントになると考えられる。

そこから今治市児童館の理念は「関係性構築」とし、この理念を達成するために取り組むべきことは、市内全域の児童や子育て世代に対して、「遊び」や「体験」の提供を通じて、友人関係、家族関係、地域関係など、身近に良好な関係性を構築するためのサポートを行い、さらには、将来子ども達が、それを自らの力で構築できるよう指導していくことと考えている。

3．今治市児童館が提供する「遊び」とは

児童館職員は、「児童の遊びを指導する者」と定義されている。関係性の構築のために必要なことは、「遊び」そのものではない。子ども達が自らの力で「遊びを成立させること」である。遊びを成立させるためには、子ども達の問題解決能力や対話能力など「非認知的能力」を培う必要がある。

「児童の遊びを指導する者」は、「遊び」を関係性構築のためのツールの１つとして捉え、子ども達が抱える問題を解決して良好な関係性を構築できるよう、様々なシーンに応じた「遊び」を指導する必要がある。

4．今治明徳短期大学について

今治明徳短期大学は、愛媛県今治市内にある私立短期大学である。

1906年（明治39年）５月１日 に、私立今治技芸女学校として開校した。建学の精神は、「明徳を明らかにする」ということで、中国の古典「大学」の一節に由来している。「明徳」とは、生まれながらにしてもっているすばらしい本性（天賦の徳性）のことで、「明徳」を教職員と学生が共に学び合う関係の中で、引き出し合い、磨き上げ、美しく逞しく生きていく力に昇華させていくことである。

平成31年４月現在、ライフデザイン学科と幼児教育学科があり263名が勉学に励んでいる。（幼児教育学科は75名）

5．今治市児童館と今治明徳短期大学の連携について

今治市と今治明徳短期大学は、平成25年に包括連携協定を締結した。その後、今治明徳短期大学は、平成26年度に全国の短期大学の中で唯一、文科省の事業である「地（知）の拠点整備事業（以下COC事業）」に採択された。COC事業とは、大学等が自治体と連携して、地域に根ざした学術研究や地域貢献を進める事業のことである。

さらに今治市は、平成27年10月に、まち・ひと・しごと創生法（平成26年法律第136号）第10条に基づき、「今治市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。その中で「今治明徳短期大学のCOC事業の『地域に根ざし地域に貢献する人材の育成輩出』と『知の共有と社会還元』を目指した取り組みと連携し、地域課題の解決に取り組む」と明記した。

以下で、今治市児童館と今治明徳短期大学が連携した取り組みを紹介したい。

（1）地域志向科目「地域と子育て支援」について

今治明徳短期大学幼児教育学科は、平成27年度から平成29年度は「総合演習」、平成30年度からは「地域と子育て支援」という名称で地域志向科目を開講している。

内容については、「めいたんパーク」（令和元年度からは、「おでかけ児童館」＋「めいたん広場」）の運営や「バリっこフェスタ」（今治市児童館主催イベント）への参加など、今治市児童館との連携を軸としたものである。

「めいたんパーク」は、COC事業の一環として、平成26年度から平成30年度にかけて、同大学幼児教育学科と今治市児童館が連携して乳幼児親子対象のプログラムを実施したものである。

期間中の実施回数と利用人数については、平成26年度は、実施回数15回・参加人数294人

（子ども158人、大人136人）、平成27年度は、実施回数36回・参加人数1,949人（子ども1,061人、大人888人）、平成28年度は、実施回数38回・参加人数2,100人（子ども1,164人、大人936人）、平成29年度は、実施回数33回・参加人数1,892人（子ども1,017人、大人875人）、平成30年度は、実施回数24回・参加者数1,506人（子ども792人、大人714人）であった。

実施にあたっての役割分担は、プログラムの立案と当日の運営は今治市児童館、学生指導は今治明徳短期大学教職員、運営サポートを今治明徳短期大学生が行うといったものであった。

以下で、参加学生のアンケート結果を一部紹介したい。

「めいたんパークに集う親子の関係を観察し、見守ることで何を学んだか」という質問に対しては、「すぐに『だめ』というのではなく、少し見守ることで、子どもが主体的に遊べるということを学んだ」、「私たちには見せない子どもの表情や、親は集団の中で遊んでほしいと思っているが、子どもは親といたいという思いの差」との回答があった。

「めいたんパークで子どもと関わることで何を学んだか」という質問に対しては、「兄弟で利用している子どもの様子から、兄弟の関係性がわかった」、「子ども一人ひとりの成長や発達の違い、未満児との関り方」、「保育所の子どもとの違い、あまり人に慣れていない」、「未満児の遊びには環境構成が重要」との回答があった。

「めいたんパークで保護者と関わることで何を学んだか」という質問に対しては、「話を聞くだけでも保護者の助けになること」、「保護者との言葉づかいや接し方の難しさを学んだ、保護者からの質問に対して悩みながらも答えることができた」との回答があった。

「めいたんパークでスタッフ（児童館職員）と関わることで何を学んだか」という質問に対しては、「多くの遊びや、絵本の読み聞かせ、手遊び、導入を学んだ」、「未満児の遊びを学べた」、「笑顔で接すること、人数や年齢に応じて臨機応変に対応することの大切さを学んだ」、「環境づくり、環境設定の仕方を学んだ」、「保育室での保育とは違い、初見の親子も利用するため、説明のわかりやすさや内容などが工夫されていることがわかった」との回答があった。

これらアンケート結果から、「めいたんパーク」では、学生に対して実践的な学びの場を提供することでき、また教育的効果もあったと考えられる。

次に参加保護者からのアンケート結果を紹介したい。（平成31年１、２月実施、回答数33、複数回答可）

『「めいたんパーク」に遊びに来る決め手はなんですか』という質問に対して、「活動内容」との回答が23、「自宅から近い」との回答が14、「スタッフの雰囲気」と「子どもがのびのび過ごせる」との回答が13、「さつまいも植え・芋ほり・やきいも等の食育体験ができる」との回答が12であった。

『「めいたんパーク」に参加して、あなた自身や子育てに何か変化がありましたか。』という質問では、「子育てが楽しくなった」との回答が11、「話し相手が増えた」との回答が９、「学ぶ楽しさを感じるようになった」との回答が７、「イライラが減った」との回答が５であった。

企画内容、環境づくり、スタッフの対応など、参加者保護者からも高評価が得られた。また「子育てが楽しくなった。」、「イライラが減った」など回答結果から、子育ての負担軽減にも繋がったと考えられる。

今治明徳短期大学の教職員によると「今治明徳短期大学は付属の保育園や幼稚園等を持たないため、学生のために実践の場を確保していくことが長年の課題であった。COC事業をきっかけに、今治市児童館と連携するようになり、効果的な実践の場を提供できるようになった。また、担当している児童館職員は、学生のよい模範になっている。」とのことであった。

令和元年度からは、今治市児童館職員が中心を担うプログラムを年に４回、学生だけで企画・運営するサロン型子育て広場（「めいたん広場」）

を年に４回開催している。「めいたん広場」では、今治市の保健担当部局等の職員による子育て講座を実施している。令和元年度の題材は、「今治市子育て支援サービスについて」、「卒乳・オムツ離れについて」、「乳幼児の食事について」、「歯の健康」である。

今治市としても子育て世代に対して施策を紹介する機会が増え、大変ありがたく思っている。また、学生にとっては市職員と子育て世代のやりとりから地域課題や、その解決方法などを学ぶことができたと考える。

令和元年度に、「めいたん広場」で実施した保護者アンケートでは、学生が提供するプログラムのスキルは徐々に上がってきていることがわかった。しかしながら、保護者とのコミュニケーションに乏しいこともわかった。令和元年８月に実施した今治市と今治明徳短期大学教職員との打ち合わせでは、その対応策についても話し合った。

令和２年１月には学生による成果発表会を予定している。「めいたん広場」で学んだことを、自分たちの言葉で伝えてほしいと思う。

（２）バリっこフェスタへの参加について

今治市児童館の主催事業である「じどうかん☆バリっこフェスタ」には、今治明徳短期大学の幼児教育学科１年生が、必須科目の「地域と子育て支援Ⅰ」で参加している。

「じどうかん☆バリっこフェスタ」は、市内７館の合同行事として、平成19年度から実施している。来場者数等については、平成28年度は、協力団体数55団体、来館者数6,000人、平成29年は協力団体数66団体、来場者数6,300人、平成30年度は協力団体数74団体、来場者数6,800人、令和元年度は協力団体数92団体、来場者数は8,500人であった。

近年は、模擬紙幣「バリー」を使って、ゲームや運動遊び、工作などを楽しめる「バリっこシティ」が人気を集めている。「バリっこシティ」では、今治市児童館の若手職員が、それぞれコーナーを持ち、企画・準備・運営の全てを担っている。各ブースには、200名～300名の子ども達が訪れ、若手職員にとっては企画力やコミュニケーション能力など、現状スキルを検証する絶好の機会となる。今治明徳短期大学生は、その「バリっこシティ」で、各ブースの運営補助を行っている。そこでは受付やゲーム説明などを担い、子ども達と関わることの楽しさを学んでいる。

本事業は地域福祉活動の一環として実施している。出展者や来場者、マスコミ等を通じて、地域全体に今治市の子育て問題を喚起することで、今治市全体の児童福祉を増進していくことを目的としている。

出展者は、出展準備に際して、地域の子育て事情を把握することから始まり、地域の子育て問題を解決するために還元できることを考える。今治市児童館においては、出展者との打ち合わせの際には、積極的に地域課題などを伝えるようにしている。

小さな取り組みではあるが、一歩ずつ息の長い活動を続け、地域住民の意識文化の醸成に努めていきたい。

（３）「児童厚生二級指導員養成課程」について

今治明徳短期大学では、二年次に、「児童館・放課後児童クラブの活動内容と指導法Ⅰ」と「児童館・放課後児童クラブの機能と運営」の単位取得と児童館実習を行うことで、児童厚生二級指導員資格を取得できる。平成30年度は８名の学生が卒業時に取得した。令和元年度は４名が勉学に励んでいる。

「児童館・放課後児童クラブの活動内容と指導法Ⅰ」では、今治市児童館職員が講師を務めている。授業内容については、全15回で、健全育成論、児童厚生員としての職務のあり方、児童館と地域の関わり、児童館におけるソーシャルワークなど、現場における実践的な内容となっている。また、フィールドワークとして、「じどうかん☆バリっこフェスタ」で、乳幼児コーナーの運営補助にも参加している。

（４）児童館実習（現在は保育実習Ⅲ）について

今治明徳短期大学の児童館実習については、平成12年度より受け入れを行っている。実習

期間は８月から９月で概ね10日間、90時間以上である。実習中は、児童館職員から実務を学ぶとともに、夏祭りのコーナー企画など、実習先の児童館から与えられた課題に取り組んでいる。さらに、地域福祉活動として、児童クラブなど、保育所以外の子育て支援施設や地域行事などで「遊び」を提供している。保育従事者としての職業選択の領域を拡げるとともに、地域活動について学ぶ目的がある。

実習生は、これら活動結果と考察を毎日研修ノートに記録し、児童館長は毎日それを確認しながら、実習生の習熟度に合わせた丁寧な指導を行っている。

（５）児童館でのボランティアについて

今治明徳短期大学生の今治市児童館でのボランティア活動実績は年間20件ほどに上る。内容は、FC今治（今治市をホームタウンとするサッカーチーム）のホーム戦などでの「おでかけ児童館」、公民館行事などの地域福祉活動、クリスマス会などの館内活動、小島での自然ふれあい体験活動である。今治明徳短期大学も学生に対して積極的に児童館でのボランティア活動を呼びかけている。

特筆すべきは、今治明徳短期大学の卒業生で、今治市児童館に就職した者の大部分は、小島での自然ふれあい体験活動の経験者であることである。

小島での自然ふれあい体験活動は平成６年に始まり、令和元年で26年目になる。平成30年度は、小学１～２年生の日帰り活動を１回、３～４年生の１泊２日のキャンプ活動を１回、５～６年生の３泊４日を１回行った。参加者は、児童、ボランティア（一般・学生）、児童館職員の全員で延べ125人であった。そのうち今治明徳短期大学生の参加者は延べ22名であった。

日頃児童館では、活動場所、活動時間、職員数など多くの制約を抱えながら活動している。そのため、小島（面積0.50㎢、周囲３㎞、平成30年12月時点で８世帯10名が居住）という瀬戸内海に浮かぶ離島を活用して、市内７館の職員体制で参加児童に「遊び」や「体験」を提供し、より効果的に児童健全育成を進めていくことを目的としている。

児童館の日常業務は、「自由来館」という条件の下、大部分を施設設備や地域住民のコンテンツに頼りながら実施している。そのため遊戯施設が一切ない小島での活動は、「遊び」の本質を捉えたものでなければならず、児童館職員としてのスキルを大きく試されるものである。そういった中で、今治市児童館は共通理念を形成するとともに、児童館職員においてはキャリア形成に繋げてきた。

今治市児童館の理念は「関係性構築」である。小島での活動についても同様である。この活動の重要課題は、参加児童を誰一人として孤立させず、全員がよりよい関係性を構築できるよう導くことである。

活動については、まず参加児童をグループに分ける。各グループには、それぞれ学生を配置する。全体指導は児童館職員が担い、学生は児童館職員の指示を、子ども達にわかりやすく伝えるとともに、グループのメンバー全員が良好な関係を築けるよう助言・アドバイスを行う。この活動は、アドベンチャー的な要素は非常に薄い。食事の準備や荷物運びなどは全て児童館職員が行う。その代わりに、子ども達には、小島での時間をゆっくりと過ごしながら、児童館職員や学生の指導の下、参加者同士の関係性づくりに専念する。

プログラムについては、小島に到着するとすぐに「友達づくりゲーム」を行う。最初に名札に名前を書いてもらい、グループ内で「あ・い・う・え・お」順や、誕生日順や兄弟順などに並べるゲームである。このゲームの効果は、遊びながら自己紹介を行えることである。

その後、キャンプ場の名称を決め、海水浴、巻き割り、テント張り、キャンプファイヤー、オリエンテーリングなどを行う。グループで話し合いや協力をしながら進めていくものばかりである。

この活動の効果に繋がる例を紹介したい。キャンプ場の名前を決める際に、子ども達が話し合っ

た結果、「えがお村」と「元気村」という意見が最後まで残った。しかしながら、それからが決まらなかった。そこで、児童館職員は、「両方の意見を合体させて、『えがお元気村』という考え方も１つだよ。」とアドバイスした。それをヒントに、子ども達はさらに議論を重ねた結果「えがお元気村」に決定した。多数決で、意見を切り捨てながら結論を出す方法もあるが、意見を拾い上げながら結論を導く方法もあると、子ども達は学ぶことができた。

夜にはキャンプファイヤーが行われ、大きな焚火を囲んで、伝言ゲームやじゃんけん大会、グループ対抗ゲームなどのレクレーションを行う。いずれも道具に頼らない「遊び」である。

当日初めて出会った子ども達が、「友達づくりゲーム」に始まり、様々な「遊び」や「体験」を通じて、わずか１日で打ち解け、楽しく過ごす光景を目の当たりにした時には、児童館活動の必要性や効果を実感することができる。

また、この活動を通じて、大学生にも保育者としての大切な考え方を伝えている。一例を挙げたい。

終礼の際に、列に並ばない子どもがいた。大学生は注意をしたものの子どもは一切言うことを聞かない。そのため児童館職員は、大学生に、なぜ並ばせないのかと質問した。返ってきた答えは、「子どもに注意をしたが、言うことを聞かなかった。」とのことであった。

これに対して、児童館職員が伝えたことは、「君たちは来年から『先生』と呼ばれるようになる。『先生』は、子ども達に正しいことを教え、子ども達が理解して行動に移すまでが責任である。ただ伝えただけでは責任を果たしたことにはならない。常に伝えることに真摯に向き合い、あらゆる手段の伝え方を模索しなければならない。」

このアドバイスは、その学生の腑に落ちたようで、翌日からの彼の行動は見違えるようになった。子ども達に対して、積極的に声掛けや指導を行うようになり、また伝え方も、ゆっくりと語り掛ける口調、厳しい口調、自分と相性が合わないとわかると、他の学生や児童館職員に相談したり、指導を代わってもらうなど、子ども達一人ひとりの個性を理解しながら、様々な伝え方を模索している様子であった。

そして解散式終了後には、グループを超えて、参加児童、大学生、児童館職員に一体感が生まれ、それぞれが別れを惜しみ、なかなか解散に至らない。まさに今治市児童館の理念達成の瞬間である。

この活動を通じて、参加児童は友人関係の作り方や関係性の深め方を学び、将来、身近に良好な関係を築くためのヒントを得たと思う。また、参加した学生も、子ども達が成長していく様子や活動終了時に感じる達成感や充実感など、保育従事者として必要なマインドを心に刻むことができたと考える。

（６）成果

今治明徳短期大学と今治市が連携協定を締結した以降、同大学を卒業後に今治市内で保育所や幼稚園、児童館、放課後等デイサービスなど、子育て支援施設に就職した人数は、平成26年度卒業生は12名、平成27年度卒業生は５名、平成28年度卒業生は８名、平成29年度卒業生は13名、平成30年度卒業生は14名であった。

また、今治市児童館の採用人数（臨時職員）について、今治明徳短期大学出身の採用は、平成27年度は１名（合計３名採用）、平成28年度は２名（合計３名採用）、平成29年度は２名（合計４名採用）、平成30年度は０名、令和元年度は２名（合計２名採用）であった。

今治市児童館においては、毎年のように職員募集を行っているが、連携協定締結以降は、ほぼ毎年、今治明徳短期大学生が採用試験を受け合格に至っている。そして就職後は各児童館で即戦力として活躍している。

今治明徳短期大学の卒業生で、現役の今治市児童館職員から志望動機を聴取したので紹介したい。

「『めいたんパーク』では、児童館職員が楽しそうに仕事をしていた。また毎回様々なプログラムを用意してきて、保育従事者としての頂の

高さを感じた。児童館実習では、先輩職員が地域住民と良好な関係性を築いていた。小島の活動では仕事の厳しさと充実感を学んだ。児童館ボランティアも充実感があった。学生時代に様々な活動を通じて、児童館職員と関わったが、非常に風通しのよい職場で、それぞれが理想とする保育を追求していた。今治市児童館では、自分の理想の保育を実現できると思った。」とのことであった。

若手職員には、多くの失敗を経験し、やがて大きな成功を掴むよう助言している。児童館業務を通じて、自分にあった保育スタイルを見つけ、キャリア形成に繋げてほしい。そして家族、友人、地域、同僚と良好な関係を築き、幸福度の高い人生を歩んでほしい。

6．最後に（子育てって楽しいね。）

今治市児童館のコンセプトは「子育てって楽しいね。」である。近年、「家族関係のもつれ」、「友人関係のもつれ」など、ごく近しい人間関係のもつれによる重大事件が頻発している。現代の子どもは、様々な対人関係に悩み、また「関係性」を学ぶための遊び場も減少傾向にある。児童虐待、不登校、子どもの自殺、子どもの貧困など、子ども達を取り巻く環境は非常に厳しい状況にある。

特筆すべきは児童虐待の増加である。昨今、共働き家庭が増え、個々にかかる負担が増加しているとは言え、子育てに対する意識や親子の関係性に何か変化があったように感じる。

こういった背景から、今治市児童館は、地域課題解決のためには住民意識の喚起が優先事項であると考えている。住民意識の喚起とは、児童館活動を通じて、子育て世代には、子育ての幸せを伝え、地域住民には、近隣の子ども達に関心を持つよう働きかけていくことである。

これにより、地域全体に「子育てって楽しいね。」という意識文化が醸成され、地域全体が子育て問題に目を向けるようになる。その結果住民参画が促進され、これらの問題が地域の手により解決されていく、そして、これこそが住民の幸福度の向上ではないかと考える。

私は常に「児童館は必要ですか？」と問われたら、迷わずに「こういった時代だから必要である。」と答えるようにしている。山積している地域の子育て問題に柔軟に対応でき、児童福祉に関する幅広い専門知識を有した職員がいる児童館こそ、これからの時代に必要と言えよう。

今後とも地域とともに人材を育て、「地域の子育て力向上」に務めて参りたい。また今治市児童館の職場環境を整え、職員それぞれが業務を通じて成長し、夢を叶え、自己実現に繋がるよう努力を重ねて参りたい。そして私自身、今治市児童館の一番のファンであり、彼らの能力を信じる一番の理解者でありたい。

最後になるが、本文執筆のために惜しみなく資料を提供下さった今治明徳短期大学様、日頃より児童館ボランティアに積極的に参加してくれる今治明徳短期大学生、そして今治市児童館の日々の運営にご理解、ご協力下さる地域住民の皆様に心より感謝を述べたい。